

崔 恩瑛 (チェ ウンヨン)

韓国出身

上智大学 文学部文学研究科 博士課程

男女平等について再考

今回の交流会では、ジェンダーについて再考する意味のある時間をいただきました。今回の交流会で最も印象が高かったのは女性貧困問題と各国でのジェンダー問題についての認知問題でした。

近年で女性人権の台頭で各国の女性についての政策の改善があったにも拘らず、まだ、女性の貧困問題がこれほどひどいことは考えたことのないことです。また、国会の女性議員の割合を50%であるべきとは考えないですが、他国に比較したらパーセンテージがあまり低い日韓の割合はとてもショックでした。

ある人は女性人権問題が社会表面かになったのが大きいな発展で、本当に男女不平等な時には女性に人権・権利についての言及自体が不可能だったから言っています。これは事実ではありますが、女性人権問題、ジェンダー問題の終点を社会表面化にしないためにもこの意見には認めながらもより大きいな努力が必要であります。

人権についての大衆の認知が広がるとともに、権利という問題には常に議論の中心に置かれる問題でありました。多くの国が民主主義を標榜することから、投票権が数世紀無視されてきた女性にも与えられました。

特に近年、女性の社会進出とともに女性自ら自分の権利のために戦うフェミニズムも表面に浮かび上がりましたが、行きすぎた女性優越主義がフェミニズムだと混沌されることもありました。日本ではそれほど問題視されてはいませんが、現在特に韓国と中国では男女の対立が深まっています。

自分が準備した資料で言及があった『82 年生まれのキムジヨン』についての評価の二分化、中国では今年の唐山暴力事件 への社会世論変化を例に、あらゆる事件において男女の立場からの感情移入が先行しています。

交流会でみなさまの話があったようにまだまだ女性進出には多くの壁が存在します。

長年継続されてきた慣行から、女性差別についてのラインが不分明で、現職の高官から、会社管理役まで性別拘らず、どのような言葉が差別用語かについての分別ができていない状態です。これは私たちについても同様であると思います。その状態から、感情的になり「だから女はダメだ」「だから男はダメだ」のような対立関係がさらに進めています。

ここで覚えておくべきことは、フェミニズムとは先述のように、決して男性嫌悪や女性だけのための運動ではなく、全ての人が性差別を受けることなく、自分らしく生きる社会を目指す運動であることです。この文章で言いたいのは「全ての人が差別を受けることなく、自分らしく生きる」ことにあると思います。

しかし、ここで言いたいのは普遍的に男女の物理的肉体的に力の差があることは認めなければならないです。

男女平等は全て、能力を中心に行われるべきで「女性だから」「男性だから」を理由に何らかの機会を奪われることがあっては行けないです。もちろん、その基には性別とは拘らず、全ての人が平等であるとの認識が必要不可欠です。

小坂井敏晶『民族という虚構』では知らない人を集め、グループを分けても各自グループに所属した人々で固まり、自分のグループを応援することになるとの場面が現れます。女性差別を改善

していくためには男性たちとの力合わせなしでは
叶えない問題です。

参考

小坂井敏晶『民族という虚構』ちくま学芸文庫
2011

チェナムジュ著、斉藤真理子訳『82年生まれ、キム・ジョン』2018「フェミニズム」

<https://ideasforgood.jp/glossary/feminism/>

公益財団法人 日本ユニセフ協会「子どもの人身
売買」,2018 改定

公益財団法人 日本ユニセフ協会「児童婚 子ども
の花嫁、年間約1,200万人」,2019)

厚生労働省「男女労働者それぞれの職業生活の
動向

内閣府男女共同参画局「女性が輝く社会を目指
して」